

今から五〇年ばかり前、段戸山中の、菅原（すがひら）の奥の中（なか）の河原で、川狩りの人夫たちが材木を搬んでいると、傍らの深い萱立ちの中から、木の枝を振り翳した裸形の山男が、大鹿を追っかけて来たと言う。その連中がだんだん材木を流して来て、自分の村へ宿をとった時、そのことを語ったそうである。

この話は、その中の河原附近が、もう嘘のように木を伐り尽くしてしまった後のことで、さらに、三里ほど奥へはいった処のことだった。

明治三〇年の冬だそうである。いつになく寒い年で、この模様では、もう長く山にはおられぬなどと言うほどだった。某の杉のいた小屋には、仲間が八人いたそうである。前の日までに予定の仕事が終わったので、その朝は早く起きて、新しく持ち場を決めるために、山割の相談をしたそうである。みんな小屋の前に並んで、下の窪を見ながら話をしていた。山の朝はまだ暗かった。しかもその朝に限って、窪の底一面に霧が立ちこめている。某の男は他の連中とは一人離れた処から見ていた。じっと見ているうち、霧がもこもこ動くようで、上へ上へと拡がって来る。そしてだんだん近づくに従って、色が淡紅いように変って来る。じっと見ているうち、あっと声を揚げんばかりに驚いたそうである。いままで霧とばかり思っていたのが、何千何百と、数限りなく続いた鹿の群れだった。次から次へ湧いてでも来るように、先登が脇の峯へ向けて、走っていたそうである。その時はもうみんな気がついていて、そうして誰一人声を立てるものもなかった。じっと立ったまま、その群れが全部通り過ぎるまで見ていたそうである。

それから急に山が怖ろしくなって、後一日働いて、全部小屋を引き払って帰ってしまったと言うた。某はその時二一か二だったそうである。

断片的な、とりとめのない話がつい長くなった。極めて狭い、東三河の一小部分、僅か五〔一〇〕方里に足りない間でも、そこに棲息した鹿は自ら区別があった。北から南へ、鍵形に線を引いた寒狭川、豊川の右岸地方に繁殖した鹿は、川の左岸遠江へかけていたものより遥かに長大であった。前にも言うた本宮鹿がそれである。これに反しての山地に近づくに従ってだんだん小さくなって、俗に遠州鹿と称したものは、雄鹿の三又でも七、八貫が止まりであった。山に岩石多く食物が充分でないためとも言った。鹿の生活にもまた地の利が影響したのである。